

同窓生が語る宮澤賢治

村松舜祐教授と宮澤賢治（4）

若尾紀夫（C昭39・院41）

村松舜祐教授と宮澤賢治と搗粉（炭酸石灰）

大正4年4月、盛岡高農農学科第2部（後の農芸化学科）に入学した宮澤賢治が村松舜祐教授と初めて会ったのは、教授の米国留学帰国（大正6年2月）後で、学部3年生の時である。卒業（大正7年3月）後も賢治は村松教授と親交をもち、農学校教師時代には教え子たちを盛岡高農（助手や雇）に世話をしたり、東北砕石工場技師時代には仕事に関する助言を求めるなど、その関係は村松教授が京都高等蚕糸学校校長として離盛（昭和7年3月）するまで続いた。村松教授は関豊太郎教授とともに賢治にとって盛岡高農の恩師であるといってもよい。

村松教授の専門は、農産製造・微生物学・化学であり、大豆・納豆・豆腐・味噌・醤油・清酒・葡萄酒・麦酒などを対象に微生物・蛋白質・酵素・糖質・栄養など基礎から応用の研究にまで及んでいる。今回取りあげる「石灰石粉による飯米精白法に就て」は異色と思える研究である。賢治は東北砕石工場技師時代に「炭酸石灰の搗粉としての利用・販売」について取り組んだが、ここにも両者の接点が見られる。

村松舜祐教授の研究「飯米の精白法に就て」

村松教授は、糧食研究（昭和6年）に論文「飯米の精白法に就て」を発表している。岩手日報（昭和7年3月2日・3日）にも「飯米精白法に就て」の記事が載っているが、その内容は前記論文と同じである。これに関係する卒業論文は岩手大学図書館には見当たらない。なお論文の最後に「・・飯米として精白の程度を決定する標準に就ては、今尚実験中であるから後日報告の機を得たい。」とあるが、教授は昭和7年春には盛岡を離れるので続報はないと思われる。以下に論文の概要を記載する。

飯米の精白に際して起る問題は精白の程度と精白

に搗粉を用いることである。精白の程度については、玄米、半搗、七分搗など種々あるが、食味と習慣とから飯米に白米を用いることが多い。一方白米食有害説は脚気病に起因するが、脚気病は鈴木梅太郎博士が主張するビタミンBの欠乏によるものである。ビタミンBは白米に少なく糠に多いので、糠として分離する部分を少なくして精白度を制限することが必要である。

更に白米の食用を不可とする一因は、精白に搗粉を使用することであり、その使用を禁止すべしとする考えは、現在の学界は勿論、殆ど総ての人の一致した意見である。しかしその理由とする根拠は搗粉を使用して精白したものは、水洗しても搗粉が残留するため、これを食用すれば消化器を害するというのである。

営業者よりみれば、学界におけるこの説を信じながらも経済上搗粉の使用を廃し難く、無砂搗（無搗粉で精白した白米）を標榜しつゝ、密かに搗粉を使用するという状態である。そのため飯米の精白に対する搗粉の使用は栄養上及び経済上の問題であるばかりでなく、主食に対する概念に影響する重大問題である。

それでは飯米の精白法は無砂搗にしなければならないのか。従来米の精白用搗粉は千葉県産の房州粉（珪砂）で、その大部分は珪酸からなる細微粒であり、これに類似のものは愛知県及び長野県等でも産する。しかしこれらの珪砂が得られない地方では石灰石粉を用いることもある。

私は搗粉（珪砂と石灰石粉）を用いて精白した白米と無砂搗について、普通の炊飯と同じように水洗してどの程度の搗粉が残るか、原白米及び水洗白米における灰分の含量を比較したところ、次の結果を得た。

搗粉の種類	無砂搗	珪砂	石灰石粉
原白米	0.60	0.72	0.81(%)
水洗白米	0.36	0.36	0.40

更に灰分中の成分で塩酸不溶性部分を定量し、次の結果を得た。

搗粉の種類	無砂搗	珪砂	石灰石粉
原白米	0.008	0.104	0.009(%)
水洗白米	0.003	0.003	0.002

この結果から、米の精白に搗粉を使用しても水洗すれば殆どその全部が除去されることが分かる。仮に微量に残留しても消化器に対する影響について実験的根拠を得ることは困難であって、その有害とする理由にも確固たる論拠がない。

更にこれを石灰石粉についてみると、水洗後その一部分が残留しても何ら有害な結果を来す根拠はなく、むしろ食物成分として有用な石灰が増え、白米中に過量に存在する苦土との割合が改善される。この関係（水洗後の乾物百分中に存在する石灰及び苦土の量と割合）を珪砂使用の白米及び無砂搗のものと比較すると次のようになる。石灰に対する苦土の割合は、石灰石粉使用では無砂搗に比較して半減する。

搗粉の種類	無砂搗	珪砂	石灰石粉
石灰	0.01	0.01	0.02(%)
苦土	0.04	0.04	0.04(%)
苦土／石灰	4	4	2

このように搗粉として石灰石粉を使用しても、白米に何ら有害な成分が混入しないのみならず、白米における石灰の含量が増加し苦土との割合を改善する点からみて、その使用を排すべき理由は認められない。

経済的には、搗粉の有無によって精白に要する費用に大差がある。丸六精米機を用いて、三斗の玄米を同一程度に精白するのに要する時間と電力とを測定した結果、搗粉を使用する場合に要する時間と電力とは無砂精白の場合に比べて約半減する。

精白の方法	所要時間	所要電力
無砂精白	54分	1.9キロワット時
珪砂使用	33分	1.1
石灰石粉使用	30分	1.0

精白米に残留する胚子の割合を調べた結果、胚子を保有する粒の割合は何れの場合でも約70%で、無砂精白米において特に多くはない。

以上の結果から、搗粉として石灰石粉を用いれば精白が容易であり、必要な電力と労力も節約でき、白米に残存する胚子の割合に大差はなく、白米における石灰の含量が多くなることなどが分かり、無砂搗でなければならないとする何らの理由も認められ

ない。更に鼠と鶏を用いた栄養試験でも、無砂搗・珪砂精白・石灰石粉精白で明確な相違は認められない。従って「飯米の精白法は無砂搗にすべきか」の問題に対する結論は明らかであり、無砂搗を薦めることは栄養上また経済上より決して合理的ではない。結論として飯米の精白には搗粉としては石灰石粉を使用しても何ら問題はない。

農学校教師から羅須地人協会時代

農学校教師と羅須地人協会時代について、簡単に触れよう。農学校教師として過ごした時期（大正10年12月から大正15年3月）は、賢治の生涯において精神的にも肉体的にも最も安定し充実したものであり、「春と修羅 第一集」「注文の多い料理店」はじめ多くの作品群がこの時期につくられている。しかし農学校のときに最愛の妹トシ（大正11年11月27日）を喪った。それは賢治の生涯を通じて最も衝撃的なことであり、臨終の当日にうたった挽歌「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」は、その打撃の大きき悲しみの深さを物語っている。

賢治は、大正15年3月、4年4ヶ月間勤めた花巻農学校教師をやめて、花巻下根子桜の別荘にうつり羅須地人協会を設立、農耕独居自炊生活をはじめた。その別荘は、かつてトシが病臥していた2階建ての家で北上川のみえる段丘の上にあった。家族も望んでいた、そして本人にとっても適した教師という仕事をなぜやめなければならなかったのか。保阪嘉内に宛てた手紙（書簡207）（大正14年6月25日）にあるように、教師という職業に満足することなく「本統の百姓」になろうとしたのか。「来春はわたくしも教師をやめて本統の百姓になって働きます いろいろな辛酸の中から青い蔬菜の毬やドロの木の閃きや何かを予期します わたくしも盛岡の頃とはずぶん変ってゐます あのころはすきとほる冷たい水精のやうな水の流ればかり考へてゐましたのにいまは苗代や草の生えた堰のうすら濁ったあたたかなたぐさんの微生物のたのしく流れるそんな水に足をひたしたり腕をひたして水口を繕ったりすることをねがひます。」これが賢治の思いなのか。

賢治は別荘の崖下の荒地を一人で開墾し野菜や草花などを栽培、また地域の農民たちに農業に必要なさまざまな講義（化学・土壤肥料・植物生理など）をおこない、農民のため二千枚にも及ぶ肥料設計書を無料で書いては農業の指導に当たったといわれる。賢治は「本統の百姓」をめざし、「一農民」になるべく過ごそうとしたが、所詮は「片足の百姓」だったのか。その独居自炊生活は自虐的ともいえるもの

で、粗食と過労の無理がたたって体をこわし（肺浸潤）、昭和3年8月、羅須地人協会を止めることになった。2年4ヶ月である。

羅須地人協会時代も、実状としては親がかりの独居生活であり、賢治は父親（家父長制）から完全に独立できる状況ではなかった。そのうえ病をえて実家に戻り家族の看護を受けざるおえなくなった。

東北砕石工場技師時代

東北砕石工場

東北砕石工場は大正14年に大船渡線が摺沢まで開通したとき、小岩井農場に石灰石粉を輸送しようと当時の陸中松川駅前に設立されたもので、鈴木東蔵と鈴木貞三郎の協同経営であった（宮澤賢治と東山）。当時、小岩井農場では岩手山麓の広大な酸性火山灰土壌を改良するために大量の石灰石粉の施肥を必要とし、東北砕石工場は主にその石灰石粉を納めていた。

東北砕石工場主鈴木東蔵との出会い

下根子桜の別荘から実家にもどりしばらく養生していたが、病気が快方に向かったのを機に、やがて賢治は東北砕石工場技師として働くことになる。その期間は、実質的には東北砕石工場と正式契約した昭和6年2月21日から上京中に発熱し帰花した同年9月28日までのわずか8ヶ月である。

ところが、実際には東蔵は昭和4年春に花巻の宮澤家を訪ね、病床の賢治と面会して話しあったといわれるので、これが賢治と東蔵の最初の出会であろう。その後、同年12月には、東蔵が「石灰石粉の広告」の原稿添削を依頼した手紙に対して、賢治は原稿を全面的に書き直して「肥料用炭酸石灰に就て」と題した原稿を送りかえし、文通が始まったといわれる。最後の手紙は賢治が亡くなる直前の昭和8年8月4日付けとなっている。

弟の宮澤清六氏は、その辺のいきさつを次のように述べている（兄のトランク）。「昭和四年の春、朴訥そうな人が私の店に来て病床の兄に会い度いというので二階に通したが、この人は鈴木東蔵という方で、石灰岩を粉碎して肥料をつくる東北砕石工場主であった。兄はこの人と話しているうちに、全くこの人が好きになってしまったのであった。しかもこの人の工場は、かねて賢治が考えていた土地の改良には是非必要で、農村には安くて大事な肥料を提供することが出来るし、工場でも注文が少なくて困っているということで、どうしても手伝ってやりたくてしかたがなくなった。そのために病床から広告文

を書いて送ったり、工場の拡張をすすめたりしていたが、だんだん病気も快方に向って来たので、その工場のために働く決心を固め、昭和六年の春からその東北砕石工場の技師として懸命に活動をはじめたのである。」

この文面のなかに、賢治がなぜどのような経緯で東北砕石工場技師として働くようになったのか端的に示されている。

石灰石（炭酸石灰）と賢治について

賢治はなぜ東北砕石工場の石灰石事業に関心を持ち、やがてそれにのめり込んでいったのか。「この人の工場は、かねて賢治が考えていた土地の改良には是非必要で、農村に安くて大事な肥料を提供することが出来る。」という発想はどこからくるのか。

その根源は賢治の盛岡高農時代にさかのぼる。盛岡高農の関豊太郎教授は地質土壌学・鉱物学・肥料学が専門であり、かねてから酸性土壌改良のために石灰岩末の利用普及をとまえ、北上山地に無尽蔵に埋蔵する石灰岩末でその不良土壌を改良できることを説いている。賢治はこのような関教授の話聞いていたはずである。後に賢治が東北砕石工場技師として正式契約するときに関教授あて手紙（書簡301）を書き、「農芸技術監査の立場よりの意見について」お伺いを立てていることから、恩師の強い影響を伺い知ることができる。

もう一つ重要なことは、賢治が関教授の勧めで研究生として残り、稗貫郡の地質土性調査（稗貫郡地質及土性調査報告書）を行ったことである。これによって、賢治は古里の地形・岩石・地質・土壌・植生などの自然環境について詳細に把握し、後の羅須地人協会時代の農家に対する肥料設計や稲作指導においても大いに役立ったはずである。

農学校時代にも石灰肥料のことに関心をもっていた。賢治は花巻農学校の生徒を引率して北海道修学旅行（大正13年）に行った時の「修学旅行復命書」のなかで、「これ（石灰岩末）酸性土壌地改良唯一の物なり。米国之を用ふる既に年あり。内地未だ之を製せず。早くかの北上山地の一角を砕き来りて我が荒涼たる洪積不良土に施与し草地に自らなるクローバーとチモシイとの波をつくり耕地に油々漸々たる禾穀を成ぜん。」と書いている。石灰岩末により酸性不良土壌を改良することは東北農民の農作物の増産につながるという考えは、関教授と同じであった。

東北砕石工場技師囑託について

病のため羅須地人協会をやめた賢治は、健康の回

復をまって仙台か釜石に出て独立して事業をしようという思案していた。このような時に、賢治は東蔵と出会い東北砕石工場の石灰事業に関心持つようになった。賢治のそれまでの歩みをみると、東蔵との出会いは運命的でさえある。

賢治と東蔵とは正式な契約証(昭和6年2月21日)を交わし、賢治は東北砕石工場技師嘱託となった。その契約証は次の4項目からなる。1. 信証金として一時金五百円を鈴木に預ける。2. 宮沢を技師として嘱託、報酬は年六百元で炭酸石灰で支払う。職分は、イ) 説明書と広告文の起草、ロ) 炭酸石灰に関する調査と改良、ハ) 照会回答とする。3. 宣伝地域は岩手県(小岩井農場と東磐井西磐井は除く)・青森県・秋田県・山形県とする。4. 炭酸石灰の需要期以外は壁材料を宣伝する。

賢治は、契約前(昭和6年1月)に東蔵あて手紙(書簡297)を書いている。「小生に対して東北砕石工場技手又は技師の辞令を交付し、小生はイ、石灰岩抹を主原料とする製品の改良及発明は総て之を貴工場に交付し、ロ、海外及国内の諸学説及事情は鋭意之を調査して工場の発展に資すること」との文面から、賢治は自ら技手(技師)を申し出ており、職分も製品の改良・発明や内外の事情調査などを考えていたことが分かる。

その職分は、契約前の希望であり賢治の得意とするところでもあるので、それだけでは賢治にとって大きな負担にはならないと思える。「炭酸石灰販売案内」「御存じですか新肥料 炭酸石灰 他の及ばぬ甚大なる効力」「肥料用炭酸石灰」「畑作用炭酸石灰ができました」「精白に搗粉を用ふることの可否に就て」など多くの宣伝広告文などを手掛けている。ところが、現実には賢治は技師とは名ばかりで、広告宣伝員であり外交販売員でもあった。賢治が商売に全く向いていないことは、本人自身もまた父親もよく理解していた。なぜセールスに熱中していったのか。詩「あらたなるよきみち(王冠印手帳)」にあるように、東北砕石工場技師時代は、賢治にとって始めは「あらたなるよきみち」であったが、やがて「たゞあらたなるなやみのみち」「はやくもこゝにあらたなるなやみぞつもりそめにけり」となった。それでも賢治は決意をもって進んだのだ。

肥料用以外の炭酸石灰の用途

東北砕石工場では肥料用炭酸石灰の生産と販売が中心であり、量的に大部分を占めていた。しかし、肥料としての需要期は限られており7月頃になると需要が落ち込むため、石灰石を利用した他の製品を

開発して販売する必要があった。契約証には「炭酸石灰の需要期以外は壁材料を宣伝する」とあり、賢治の関教授あて手紙にも「石灰岩を採取し・搗粉石灰岩抹及壁材料等を一日十噸位づつ作って居りまして…」とあるように、壁材料、建築用人造石、精米搗粉、養鶏用石灰なども取り扱っていた。

賢治のメモ(孔雀印手帳)によると工場事業の年間スケジュールは概ね次のようになる。10月から翌年2月までの冬期間は、肥料用炭酸石灰・建築材料・搗粉などを生産・備蓄する期間であり、3~5月は肥料用に全力投入し、6・7月は搗粉用を主力とする。8・9月は、畑作用・小岩井農場用とする。勿論、スケジュールは常時同じではなく、年によっては変更され3~5月に建築材料を取り扱うこともある。いずれにしても肥料用炭酸石灰の販売は、毎年春の短期間に集中している。

精白搗粉としての利用

搗粉は、玄米の精白(精米)を効率よくするために混ぜる微粉末で、千葉県産の房州砂(珪砂)が有名であった。勿論、現在では機械化されているので精米に搗粉を使用することはないが、当時は搗粉を混ぜないで精白する方法(無砂搗)と房州砂や石灰石粉などの搗粉を入れて精白する方法が用いられていた。東北砕石工場では、6・7月に搗粉用炭酸石灰を主力商品として販売していた。ここでは賢治と村松教授との関係を交えて、搗粉について述べよう。

東蔵あて手紙(書簡267)は、「米搗きに石灰岩粉末を使うことの可否」について、賢治が答えたものである。これが搗粉についての最初の記述であろう。当時精白に搗粉(珪砂や石灰石粉)を混ぜて搗くと胃癌の原因になるので、搗粉の使用は法律で禁止すべきであるとの意見が有力となっていた。東蔵はこの点を心配して賢治の考えを聞いたのであろう。これに対して、賢治は石灰岩製品は搗白に有効であり胃の中では胃液で溶解するので微量であれば害はなく、また石灰が混ざった米糠は鶏や牛馬にはむしろ有効であると返答している。

鈴木東蔵あて(書簡267)(昭和5年5月29日)

御照会の米搗用白土の件 營養一研究所佐伯博士発表の分と存候 思うに右は千葉県栃木県山形県等に産する石英粗面岩の浮岩乃至凝灰岩より製したるものに有之御詞の針状物は 一、石英班晶 二、玻璃物質 三、長石 中の孰れかに属するものと存候元来右白土は孰れの成分も胃液に溶解せず殊にその圭角にあつて胃壁を傷つくるものは胃癌等の原因ともなるという意味と存じ候 右に対

して石灰岩製品は仮令稜角を有し搗白に有効なるも胃中にては直ちに胃液に作用して溶解性に塩化石灰となるべく白米中に存する如き微量にては何等の害なきものと存じ候 右の点一応新聞紙上にて亦は直接研究所へ御問合せ確答を得られ置かば今後の販売に御有利と思はれ候 次に米糠に依て牛馬下痢の趣は白土によるもの石灰によるもの共に、多量に与ふれば或は当然惹起するに至るものかと存候 但し石灰によれる米糠は鶏には充分有効なるべく牛馬にも幾分はあるべくと存候 この点専門家の意見を徴され度候 肥料としては特に申し分なくよきものに候 先は貴答まで

1ヶ月後の手紙(書簡268)では、賢治は東蔵が書き送った広告類について大変よくできており、殊に搗粉の広告は宣伝効果が大きいと回答している。この中の「諸権威者の著述からの抜粋を加へたい」との賢治の考えは、いろいろの宣伝広告に現れている。搗粉の広告では、タイミングよく村松教授の研究論文を転載している。

鈴木東蔵あて(書簡268)(昭和5年6月30日)

ご送附の広告類拝見いたしました。いづれも申し分ないと思います。殊に搗粉のもの最有効と存じます。大版のものは次回には裏面の表類多少整理し諸権威者の著述から抜粋を加へたいと思いますがそれは今冬のことにいたしませう。

炭酸石灰(搗粉)の販売広告の作成

東蔵が書いたであろう搗粉広告の下原稿については分からないが、賢治は翌6年の春頃までには原稿を作成したと思われる。その広告タイトルは、「精白に搗粉を用ふることの可否に就て」である。前に述べたが、賢治は同年2月21日に東北碎石工場技師嘱託として正式契約している。おそらく、その後、東蔵から搗粉の広告がどうなっているのか問い合わせがあったのであろう。賢治は東蔵への手紙(書簡350)の中で「…搗粉の広告は万全を期して盛岡高農の村松博士の校閲を得るため清書まで三四日待つてほしい。…」と書き送っている。

鈴木東蔵あて(書簡350)(昭和6年5月25日)

(略)次に搗粉の広告今回は万全を期し度村松博士の校閲を得べく清書迄更に三四日お待ちを願上度、その上は今一度工場へお送り申上べきや或はそのまゝ山口にて印刷に附して宜しきや大体の価格枚数御指令願上候。(略)

盛岡駅から東蔵に書いた手紙(書簡352)によると、賢治は炭酸石灰を精米用搗粉として売り込むための広告を作成し、5月30日にその原稿を持って盛岡高農の村松教授を訪ねた。原稿に目を通してもらい、広告内に教授の研究論文を転載する許可を得て、そのうえ「大に有望の事業なのでしっかりやれ」との励ましを受けたとある。村松教授の研究論文「飯米の精白法に就て」(糧食研究67号)は、この年の3月に公表されたので、賢治はその情報をいち早く知り自分の広告文に転載したのである。更に手紙で、盛岡だけでも相当量の注文が得られるのではないかという見通しを伝え、搗粉の見本を持って盛岡市内の米穀店数軒を挨拶回りして搗粉の宣伝をした。

鈴木東蔵あて(書簡352)(昭和6年5月30日)

盛岡駅にて今朝当地に出て村松博士に論文転載の快諾を得並びに原稿一閱を乞い申し候。大に有望の事業故しっかりやれとの激励を頂き候。(略)搗粉(白色の品)見本出来候はゞ盛岡のみにも相当量の注文を得べく本日数軒挨拶廻り致し置候。先は

鈴木東蔵あて(書簡354)(昭和6年5月31日)

(略)明日私搗粉の意匠登録及広告印刷の御相談に参上の心組致し居り候(略)本日は高農行の試料調製と搗粉原稿の添削を致し候(略)

鈴木東蔵あて(書簡357)(昭和6年6月4日)

滝沢駅にて今朝山口活版所に参り搗粉広告印刷掛合候処前回の半分の大さとし青インク刷銅版は前回の碎石場を入れ五千枚金十五円とのこと如何に候や(略)

鈴木東蔵あて(書簡358)(昭和6年6月4日)

厨川駅にて十二時十五分当駅に下車して種馬所と育成所を訪ひ申候(略)扨明日よりは搗粉の封筒書きを致すべく先づ私にて岩手県内を書き始め申すべく右御諒承を願ひ上候

鈴木東蔵あて(書簡359)(昭和6年6月5日)

(略)本日より電話帳にて盛岡市より始めて封筒書き致し度と存候処今回は全部工場名儀にて発送致度右を当地にて印刷致すべきや或はゴム印を作り差上て工場にて裏面に押印致すべきや或は又工場名入の封筒多数御持合せ有之や至急御指図被成下度候

このように村松教授のお墨付きをもらった搗粉の広告の印刷について東蔵と相談をしたうえで、6月4日に盛岡の山口活版所に行き五千枚の印刷を依頼した。その翌日には盛岡の電話帳を調べて搗粉の封筒書きを始めた。

広告「精白に搗粉を用ふることの可否に就て」

刷り上がった搗粉の広告は、当時村松教授が行った最新の研究論文を大幅に引用している点では科学的でありまた説得力がある。その内容を要約すると次のようになる。

精白に搗粉を使用すると経済的には得策であるが、近頃は衛生上の見地から搗粉を用いて精白した飯米は有害であるとされ、混砂米が胃癌の有力な原因であるので搗粉の使用を法律で禁止せよとの意見さえある。しかし、搗粉の害といわれるものは大部分珪酸からなる房州砂（針状の水晶質物や石英の斑晶）に該当するもので、これを用いて精白した米は、水洗が不十分であればガラスの粉を食べたのと同じ害をなす場合もありうる。

ところが同じ搗粉でも、石灰石粉（炭酸石灰）では事情は全く異なる。最近の実験によれば良質の石灰石粉を用いて精白した米は、水洗すればその鉍物質の量は無砂搗と殆ど同じであるか、むしろ微量に残存する石灰は、白米中に含まれる苦土の毒を消す作用さえあり、かえって無砂搗よりも優れている。単純に搗粉に害があるというのは、玉石混同の素人論である。

これに関しては、村松博士の研究「飯米の精白法に就て」を直接参照すればことおのずから明白であるとして、その論文を大幅に採り入れている。最後に石灰石粉を用いて精白する数々の利点をあげている。「搗精する時間と電力の節約になり、熱を発することがない。得られる白米は無害であり、むしろその苦土の毒性を解消する。醸造用としては糖化が速に行はれ、半搗米としては煮熟に火力を要すること少く、少量の搗粉で足りる。その米糠は家畜家禽に無害であるばかりでなく、その必要の石灰を補給すると共に、その苦土の害を除く。」

東北砕石工場産の石灰石粉は殆ど炭酸石灰からなり、搗粉として安全優秀であり精白力は抜群であること、肥料用炭酸石灰と同様に殆んど生産原価で供給していることを宣伝している。広告には権威者の研究を紹介して科学的に隙がないように展開しているが、最後には一般の人にも分かりやすい話でまとめ、文末は今でいうキャッチ・コピー「石灰搗きの米が胃癌の原因ならば、豆腐も胃癌の原因でせう。」「石灰搗きの米糠が馬に有害ならば、それは骨無し馬でせう。」で締めくくっている。

搗粉の販売活動

山口活版所に依頼していた搗粉の広告は6月20日に刷り上がり、賢治は印刷代を払って受け取った。この日から数日かけて各方面への発送作業を行い、6月28日には盛岡市内の商店へ40通を発送し、30日には注文を取るために盛岡に出かける予定であることを知らせた（書簡363）。実際には盛岡への出張は7月1日以降になった。

ところで、手紙には「先日時事新報に所載の村松氏学説本日も別紙様の転載有之」とある。村松氏学説は「石灰石粉を搗粉として使用しても健康に害はない」という説で、既に糧食研究（昭和6年3月）に論文発表している。

昭和6年7月1日と2日は、盛岡市内29軒の肥料店・米穀店・精米所をまわり精米用搗粉需要調査と注文取りを、3日は盛岡で広告チラシの発送作業を行った。4日は盛岡と日詰をまわり、5日は水沢と黒沢尻の各店を巡訪した。12日は八幡村（稗貫郡）と石鳥谷町へ搗粉宣伝のために行き、13日には県内各組合、西東磐井郡と気仙郡各組合へ搗粉の広告文百枚を発送した。このように7月に入ってから、賢治は広告を発送し、需要調査と注文取りに精力的に歩きまわった。

鈴木東蔵あて（書簡363）（昭和6年6月29日）

（略）搗粉の広告は昨日盛岡市内にも四十通発送致置候間明日出県の序を以て右価格を以て注文を求むべく候 出品用の人造石見本は十種研出しにかけ今夕迄には製作を了すべく候 次に先日時事新報に所載の村松氏学説本日も別紙様の転載有之搗粉も今后大に有望と存ぜられ候

鈴木東蔵あて（書簡370）（昭和6年7月14日）

（略）尚搗粉の方は肥料用炭酸石灰の如く一時に大量は出でざるも冬期は断えず相当の需要あること充分確信有之（略）追て一昨日八幡村及石鳥谷町に搗粉宣伝に参り候処小口乍ら注文あり今后は蓋ろ一車売りよりも村々に細かく入りて小口にてトラック売りと致す方得策と存じ昨日来県内各組合へ更に広告百枚発送致し候 東西磐井気仙各組合へも出し置候間右御諒承被成下度候

7月3日の手紙（書簡365）では、盛岡でまわった一軒一軒の搗粉需要調査や注文取りの結果（町名と店名、現在の使用量と仕入先、摘要）について詳細な報告をしている。摘要では、賢治が商店に飛び込み搗粉の調査や注文の交渉を行ったが、その時の各店の様子や対応、賢治の心理状態が言葉短く記さ

れている。賢治の意気込みにもかかわらず注文は一つも取れなかったが、今後の下地は作った積もりであると述べ、その理由を分析し今後の対策についても述べている。その文面から、必死になってセールスしたが、一向に成果があがらず落胆している賢治の姿が伺える。賢治は「屈せずして絶えず外交することの外はなき」と自分自身に言い聞かせている。

鈴木東蔵あて（書簡365）（昭和6年7月3日）

昨日及一昨日盛岡市内に於る各店搗粉需要状態調査の成績左の如くに御座候（一覧表：町名・店名・月使用量・仕入先・適要）以上の如き次第にて遂に注文としては一車をも得ざりし訳に御座候へ共今後の下地は作りたる積りに有之候。尚右不成績の理由左（略：五項目）の如きかと存ぜられ候。之に対し当工場策戦としては、「一、（略）石灰入の米糠を高価ならしむるやう宣伝すること、二、（略）一車値段にて小売し、大精米場には更に廉価に供給すること、三、屈せずして絶えず外交すること」の外はなきかと存ぜられ候。今日は当地にて残部の発送、（略）明日は今一度盛岡及日詰等手を入れて見度と存居候

文語詩「朝は北海道の拓植博覧会へ送るとて」

朝は北海道の拓植博覧会へ送るとて
標本あまたたづさえ来り
それが硬度のセメントに均しく
色彩宇内に冠たりなど
或はこれがひろがりは
大連蠣殻の移入を防遏すべき点
殊に審査を乞ふなどと
や、心にもなきこと書いて
県庁を立ち出でたりけるに
ときに小都を囲みたる
山山に雲低くして
木々泣かまほしき藍なりけるを
出でて次々米搗ける
門低き家また門広く乱れたる
家々を
次より次とわたり来り
おのにもまことのことばもて
或はことばや、低く
或は闘ふさまなして
二十二軒を経めぐりて
夕暮小都のはづれなる
小き駅にたどり来れば
駅前の井戸に人あまた集り

黒き煙わづかに吐けるポンプあり
余りに大なる屈たう性は
むしろ脆弱といふべきこと
禾本の数に異らずなど
こゝろあまりに傷みたれば
口うちそゝぎいこはんと
外の面にいづればいつしか
ポンプことごととうごきゐて
見らいぶかしきさまに眉をひそめみる
「この水よく呑むべしや」と戯るゝに
④のはんでん着たる
肩はゞ広きをのこ立ちありて
「何か苦しからんいざ召たまへ」とて
蛇管の口をとりてこれを揚げるに
水いと烈しく噴きて見ら逃げ去る
すなはち笑みて掬はんとするに
時に水すなはちやめり
をのこ
「こは惜しきことかな
いま少し早く来り給はゞ」
といと之を惜むさまなり
われすなはち
とみに疲れ癒え
全身洗へるこゝちして立ち
雲たち迷ふ青黒き山をば望み見たり
そは諸仏菩薩といはれしもの
つねにあらたなるかたちして
うごきはたらけばなり

「孔雀印手帳」にあるこの詩には、岩手県庁や米穀店などをまわって搗粉の販売に努めているようすが描かれている。6月29日の手紙（書簡363）では、この日東蔵から連絡のあった搗粉の販売価格にもとづいて注文を取るために、明日は盛岡に出かける予定であること、北海道拓植博覧会（昭和6年7月12日～8月20日）に出品するための人造石見本は研出しにかけ今夕までに仕上がることを報告している。

6月30日または翌7月1日、賢治はその見本を持って県庁を訪れ、北海道に送ってもらうよう依頼した。その後、県庁を出てから盛岡の肥料店・米穀店・精米所など29軒を次々とめぐり歩き、搗粉の商談に努めたが全く成果がなかった（書簡365）。夕暮、精根尽き果て盛岡のはづれにある小さな駅（仙北町駅）にたどり着いたところ、駅前に井戸がありポンプが黒い煙を吐いて頼りなげに動き、周りには多くの人が群がっていた。その日商談で受けた屈辱によって心も疲れはててふさいだ気分になっていたので井戸水を飲もうとしたところ、肩幅が広い半天着の男

がポンプの蛇管をとって勧めてくれたが、それまで勢いよく出ていた水が急に止まってしまった。その時、男が「惜しいことをしました。もう少し早ければよかったのに。」と心から慰めてくれたので、賢治の疲れはいえて全身が洗われるような心地がした。

恩師村松教授の激励をうけ作成した搗粉の広告を携えて、暑い夏の日に盛岡市内の店を次々と訪ね歩いたが、結局一車の注文も得られないまま夕方になってしまい、慣れない商談で疲れはてた。その上、巡回先の店では屈辱を受け不愉快な思いをしたという。この詩を読むと、搗粉をセールスする賢治の心情はどのようなものであったか偲ばれる。

その後、昭和6年9月19日早朝、汽車で宮城県小牛田に向かい、小牛田肥料会社で麦作用石灰の売り込みをして注文を受ける。また斎藤報恩農業館の工藤文太郎館長に会い、宮城県では炭酸石灰の搗粉を奨励するとの意向があり、東北砕石工場産の搗粉は農村へ充分見込みあるようだとの手紙（書簡391）を東蔵に書き送る。

その日の午後には、賢治は東北砕石工場の仕事で仙台まで足を伸ばして一泊、翌20日の午後上京した。ところがその途中車中で発熱、在京中も病臥していたが、一向に回復しないため9月28日に帰花することになる。帰花してから亡くなるまでの2年間は、東北砕石工場技師としての実質的な仕事からは離れるが、搗粉に関する幾つかの手紙が残されている。

賢治は「盛岡高農の村松教授が日報に三度にわたり石灰石粉の効果談話を発表した」こと（書簡409）（昭和7年3月13日）を知らせているが、日報紙上には2回の記事「飯米精白法に就て（昭和7年3月2日・3日）」しか見当たらない。

昭和7年4月19日の手紙（書簡412）では、「(略)一昨日、千葉喜一郎（福島県獣医）が村松博士の紹介で訪ねてきた。東北砕石工場産の搗粉と房州砂及び三春産のもので家畜飼養試験を農林省に委託して大規模に行ったところ、工場産のものは殆んど薬用炭酸石灰に劣らない良好な成績を挙げ、他地産のものは及ばないこと確認した。(略)同氏によれば価格の点を考慮する必要があるが販路は充分にある。(略)」など良いニュースを東蔵に伝えている。

搗粉の販売は思わしくなく、壁材料や建築人造石などの製造・販売も手掛けていた。それでも賢治は引き続き搗粉に関心をもち、必要な情報を東蔵に知らせている。

村松教授が京都へ栄転する際（昭和7年3月16日）には、記念品と工場からの謝状を東蔵に依頼している。そこには、農学校生徒の盛岡高農への就職や炭酸石灰の販売に当たったの助言などでお世話になっ

た恩師村松教授に対する賢治の心遣いがみられる。

鈴木東蔵あて（書簡411）（昭和7年3月20日前後）

(略)本日盛高農、村松博士京都へ御栄転相成候間、賀状並に私永年の恩顧を加へ紀念品代に金五円御送申置候間若し出来るなれば工場より謝状（簡単に御在任中の御看顧を奉謝候 盛岡高等農林学校内村松舜祐殿）一通手紙にて御差出願はるれば幸甚に御座候。但し御考に依て必要なければ勿論お控奉願候。

参考資料

- ・「飯米の精白法に就て」：村松舜祐、糧食研究 67号（昭和6年3月30日）
- ・「飯米精白法に就て」村松舜祐氏談：岩手日報（昭和7年3月2日・3日）
- ・年譜 宮澤賢治伝：堀尾青史著、図書新聞双書（昭和41年）
- ・宮澤賢治と東山：鈴木 實著、熊谷印刷（昭和61年）
- ・兄のトランク：宮澤清六著、ちくま文庫（平成3年）
- ・新校本 宮澤賢治全集 第13、14、15巻：筑摩書房（平成9年）
- ・宮沢賢治 東北砕石工場技師論：佐藤通雅著、洋々社（平成12年）